
時と想いを超えて ~ヒカルとティナの冒険記~

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と想いを超えて ～ヒカルとティナの冒険記～

【Zコード】

Z8916Z

【作者名】

ホープ

【あらすじ】

ここはポケモンだけが住む世界。多くのポケモンが探検隊を結成して、人助けならぬポケ助けや、未開の地の探索などをして、日々充実した日々を送っていた。

もちろん、イーブイのティナも探検隊にとても憧れていますが、なかなか後一歩が踏み出せないでいた。

そんな中、突如元人間だというヒカルと海岸で出会って ?

【ポケモン不思議のダンジョン空の探検隊のストーリーを尊重しつ、オリジナルのストーリーも展開されていきます】

プロローグ・嵐の海で

とても激しい嵐の夜。そんな中、この海を割くように進んでいく僕らの乗っている船。目指すはこの世界で一番大きい大陸だ。

早くしなければ、またあいつが追ってくる。そうなれば振り出しへ戻るのは目に見えているから、今度こそあいつが来る前に終わらせよう。

少し遠くに大きな影が見えてきた。もう少しだ。もう少しで僕らの目指している大陸に到着できる。

そんな、一瞬も気が抜けない中、突然の轟音と迸る閃光が走る。それを感じたと思った次の瞬間には、まぶた瞼まぶたをとても重く感じ、体に力が入らなくなっていた。

「大丈夫か!? しつかりしろ! しつかりするんだ!」

僕の相棒が心配しているのが分かる。でも、今さっき何があったのか僕には全然分からぬ。

「何が……?」

「お前に雷が直撃したんだ! 意識を保て!」

僕の相棒に、僕に雷が落ちたと言われても、全く現実味を感じることが出来ない。事実を把握できない。そもそも、何で僕は嵐の日に海の真ん中にいるの?

「無理するな。まずはお前の安全が第一だ」

「」の声が誰だか分からぬ。とても頼りにしていた声だとは思うけど、それが誰なのかが全く分からない。思い出そうとする頭が痛くなる。

「つおつー？」

今にも二つに裂けてしまいそうな、海を二つに割いて進んでいた船が、音を立ててバラバラに碎ける。誰だか分からぬような煩わしい声は破片に乗つてどこかへ流れていき、僕は海の中に放り出された。

必死に僕の名前を呼ぶ誰かの声は耳に残る事もなく、ただこの大波と同じように流されていく。それを叫んでいるポケモンも一緒に。

途中に感じた妙な違和感を最後に、僕の意識は完全に、消えた。

第一話・流れ着く光

「またダメ、なのがなあ……」

田の前のピンクのポケモンをモチーフにした建物 プクリンの
ギルドはとてもフレンドリーに笑っている。だけれど、私はそれに
恐怖心しか抱いて無い。

だつてだつて、中がどうなってるか分からないんだよ？ 修業は
とても厳しいって聞くし、もしかしたら間違えられて襲われちゃう
かもしれないし……。

自分の中でもそれはあり得ないと否定する声が聞こえる。でも、
それでもこの建物は怖い。

「ううん。今日は勇気を出さなきゃ。早くしないと田が暮れち
やうもん」

覚悟を置いて……あれ？ 覚悟を決めてつていうんだっけ。び
ちでもいいかな。

とにかく、がっしりとしまつている鉄格子を開けてもらおうと入
口の方まで、一步一歩踏みしめて歩く。いつもは歩き出す事も出来
ずに帰ってしまうけど、今日はなんだかほんの少しの勇気が持てた。

足場が網田模様になっている所に差し掛かると、自分の下の部分
から声が聞こえ！

「ポケモン発見ポケモン発見！」

「わあつー！」

その声を聞いて、おもわず後ろに飛び退いた。あつ、やつぱり私には無理なのかな……？

「誰の足形？ 誰の足形？」

「足形はイーブイ！ 足形はイーブイ！」

私の種族名が出ると、顔から火が噴き出るかのように緊張してしまって、もう私は、無我夢中でブクリンのギルドがある小高い丘を駆け下りていた。

私つて、自分の種族名が知られただけでこんなにも怯えちゃう。これじゃあ探検隊なんて夢のまた夢……。

火照った顔が少しづつ、少しだけ冷やされて行く。もう少しでいつもの場所にたどり着ける。それまで頑張って走り抜けよう。

少し息が上がつて来ている。あのギルドから海岸までほんの少しの距離しかないのに。

火照った顔と走り疲れた体を癒すのに、この海岸はとても丁度良い所。静かな波の音と、足のすぐ近くまで来る水が私の体と心を癒してくれている。海を眺めれば、沈みかけの夕陽がまだ少し顔を出していた。

少し落ち着いてきた所で、さっきの事を思い出す。ずっとپクリンのギルドの前で耳を垂らしながらひづりをしていて、やつとの思いで覚悟を決めたのに、ほんの少しビックリした事があつただけでここまで逃げてきてしまったんだっけ。

「はあ……。私って、どうしてこんなにも弱虫なんだひづ」

この、静かな波の音は私を責め立てるともないし、驚かせるともない。昨日の嵐の時の波とは全然違う、優しい波の音だ。

よくよく海岸を見てみると、昨日の嵐のせいで折れた木々などが流れ着いているのが田についた。

「弱虫な私でも、この海岸を綺麗にするべからざり出来るもん」

一つ、私のすぐ隣にあった小枝を咥え、海岸の端つっこある出島場の所に置いた。ここならあまり田立たなこと無い。

一つ、また一つと小枝を拾いつづけ、明日このままひづと頑張れると思えてきた。

理由なんてない。でも、自分の心の中に何かが芽生えてきたと私は思えた。……ん？ あれはなんだろ？ 砂の色に紛れてたけど、あれは、ポケモン？

この海岸のちょうど真ん中あたり。海に潮が満ちたら沈んでしまいそうな所にそのポケモンはいた。

助けなくちゃ。

まだ潮が満ちる時間には程遠い。私はそのポケモンを助けたい一心ですぐに近寄つていった。

近寄つてみて分かる。このポケモンは私と同じくらいの年みたい。まだ、私と同じくらい未来に可能性があるポケモン。助けたいと思う気持ちが強くなる。

「ねえ、大丈夫？ ねえねえ！」

必死にこの黄色くて可愛らしい姿をしたポケモン ピカチュウの体を揺さぶつてみる。反応は、あつた。かすかにうめき声が聞こえたの。

「じっかりして…」

酷く体をゆすられて、何事かと思って僕は瞼を持ちあげた。目の前には可愛らしい等身大のイーブイまぶたが、心配したまなざしどうやらを見つめてきている。……等身大？

「うわあー」

しかし、僕が飛び起きたことでそのままざしが安堵した物に変わる。悪いひと……悪いポケモンじゃないみたい。

「良かつたあ。ビニが悪い所はない？」

「え、え……？」

「イーブイだよね？ 僕の目の前にいるのは、正真正銘のイーブイだよね？」

心配そうなまなざしを向けているから、僕を心配しているのは間違いない。それはとても嬉しい。でも、問題は別の所にある。

何で、ニンゲンの僕がイーブイの言葉を理解できるんだ？

「え、えーっと、ちょっと聞いてもいい？」

「なあに？ 私が答えられる事だつたら何でも答えるよ！」

それじゃあ遠慮なく訊ねられる。僕は……。

「僕は、今どんな姿をしているのかな？」

自分でもこんなに頭が回るとは思わなかつた。自分がポケモンの言葉が理解できるということは、自分がポケモンになつてしまつたか、頭がおかしくなつてしまつたかの一択だ。もしかしたら、このイーブイが天才で、人の言葉が分かるのかもしれないという可能性もあるけど……。

「あはは。どこからどう見ても普通のピカチュウだよ。それがどうかしたの？」

発する言葉が見当たらない。でも、手を見てみればとても黄色く、背中を振り向けば大きな尻尾が。ほっぺたには小さなふくらみがあるのが分かる。

「え、嘘！ ホントにピカチュウになっちゃつたの？」

「なつちやつたつて……。なんか怪しいね、キミ」

僕も怪しいと思つよ。突然こんなのが現れたら僕もこんなリアクションを取ると思う。

「全然、全く怪しくないよ！ それより、助けてくれてありがとう解はしたけど、信用してもらえるかは分からぬ。でも、このイーブイは信用してくれたみたい。目から疑いの色が消える。

「どういたしまして！ 私はティナ、キミは？」

感謝されたのがとても嬉しかったみたいだ。体全体、特に尻尾で喜びを表している。

「僕は……ヒカル。信じてもらえないかもしねいけど、元々は人間だったんだ」

僕のその一言がとても衝撃的だつたようだ。イーブイ ティナはちょっと後ろに飛び退く。さつきも少し思つたけど、ティナはリアクションがとても大きい。

「え、ええーー！？ でも、今はどこからどう見てもピカチュウだよ、ヒカル」

「そりなんだよ。僕にも何が何だか分からぬんだ」

ティナが悩み始めると、辺り一面を波の音だけが包み込む。

「ううして、二ンゲンだつたって覚えてるんだやつ。それ以外の事は思いだそっとすると、頭が痛くなる。

「うーん、僕がポケモンになる前、一体何があつたんだろう。

思い出せない。記憶をしまつているタンスの鍵がそのタンスの中に入っている、そんな感じだ。一つのことが思い出せれば全てが思い出せそうなのに、その鍵が見つからない。

この話を切り上げよう。そう思つてティナと向き直したとき、ティナがどこか遠くを眺めているのに気がついた。僕もそつちの方を見ていると、そこにはあまり良い雰囲気とは言えない、三四匹のポケモンがいた。

「ヒカルヒカル。あれってかなり危ない状況だよ！ 早く助けないと……」

ティナの言つとおり、一匹の青い、まん丸としたポケモンと、一匹の空を飛んでいるいかにも柄が悪そうなポケモンが向かい合い、対峙しているところだった。

「リルはどこにいるの？ 君達がどこかに連れてつたって聞いたけど」「

水色のポケモンはリルをと呼ばれるポケモンを探しているみたい。

「あの小さい水色のポケモン？ その洞窟の中におひできやつたなあ。ハハ、困ったよ、ドガース君」

「そうだなあ、俺達も疲れちゃつて、もう洞窟になんか入れないぜ

それに対し柄の悪い一匹のポケモン 片方はドガースとこうひらしい奴らは、詫びる様子もなく、水色のポケモンをおちよくなっていた。

その一匹の言葉に絶句した水色のポケモンは、ショックで目に戸をためている。 あいつら、あんなにひどい事を平然と言つなんて、絶対に許せない。

「俺達は帰るけど、一匹でも行けると思うんなら行けばいいじゃないか。すぐそこ洞窟だよ」

最後まで、詫びるどころか水色のポケモンをおちよくり倒していった。 それにはティナも堪え切れない様子だつたけど、まずはあのポケモンを助けるのが先決。 ティナが喧嘩を吹っ掛ける前に僕は水色のポケモンの方に近寄つて行つた。

「ねえ、リルつてポケモンを探してるの？ 僕達に出来る事があるなら手伝つよ？」

そのポケモンはまだ涙を目に溜めているだけだったけど、今にも泣き出しそうな勢いだ。

「え……？ ホント、ですか？」

「もちろんー 私もヒカルも、困つてているポケモンを見捨てるなんて出来ないもの」

ティナも怒りを抑えてこちらに来てくれたみたいだ。 しかも、僕の事をもう友達のように扱つてくれている。

「ありがとうございます！」

涙を拭う仕草をすることもなく、僕達にお礼を述べてくれた。少し、彼の顔に笑顔が戻つてくる。

「ボクはマリルのリオと言います。実は、リルはボクの弟で、ボクがちょっと田を離した隙に……あいつらに……連れて行かれて……しまつて……」

だんだんと言葉の歯切れが悪くなり、今にも泣き出しそうなそんな雰囲気を醸し出していた。きっと、とても弟思いのポケモンなんだろう。

「そこまでいいよ。それ以上話すのは、辛いでしょ？ 私達が洞窟にいるリル君を助けてくるから、それまで待つてくれるかな」
リオの領きを見ると、ティナは笑顔でそれを返し、足早に海岸の横にそびえたつ横穴に向かっていく。無論、僕もそれを追う。

入口の前では、洞窟内から零れ出る湿気をかすかに感じ取ることが出来た。きっと、中は海水がしみ込んでいるのだと思つ。

「さあ中へとティナが進むのかと思つたら、洞窟の前で恐れをなしたように震えていた。

「ティナ、大丈夫？」

「あつ、……うん、大丈夫！ それじゃ、リル君を助けに行こつー！」

まだ震えている前足を必死に動かしながら、洞窟の中へ進んでいく。きっと、ティナも怖いんだろう。僕もちょっとだけ、怖い。

恐怖で塗り潰されそうな少しの勇気を振り絞つて、僕もティナも、洞窟へ踏み入る一步を踏み出す。ただ、リル君を助けたいという思いだけを胸に。

第一話・流れ着く光（後書き）

サブタイトルの流れ着く光からも分かるように、ヒカルの名前は漢字で書くと光になります。

第一話・海岸の洞窟

「の洞窟に入つて最初のうちは暗闇の中、手探りで進んでいた。

少し進むとぽつかりと開いた洞窟の穴から海水が入り込んでいたりしてたりする地形が見つかって、そこからまぶしいほど夕焼けが差し込んでくる。

僕の前を歩くティナは、足はガクガク震えていて、気を許せばいつでも転んでしまいそうなほど、おぼつかない歩き方をしていた。

「……これ、かなあ？」

ティナが立ち止って、細く、縦に長い洞窟の裂け目の中を見渡そうとしている。足を止めていると、その震えが更によく伝わっていく。でも、リル君を助けるために、どんなに怖くても足を止めずに歩み続けるその姿は、僕の心中にも伝わってくる物があった。

「ヒカル。ヒカルは知らないと思うけど、この先は『不思議のダンジョン』って呼ばれる所でね、えーっと、入るたびに地形が変わる所だったと思うけど……。『めんね、こじら辺の記憶はダメダメ』

ティナの話の通りなら、確かに不思議な所だ。入るたびに地形が変わる……、何でそんなことが起きるんだろう。

でも、そんな疑問を考える時間はない。まずはリル君を助けるのが第一だから。

「分かった。でも、この中にリル君がいるんでしょう？ それなら行

かなくちゅー！

上手く説明できなくて落ち込んでいたティナだったけど、リル君とこう言葉ではつとして、その表情には助けたいという気持ちが満ち溢れている。

「うん！ 私達がここで立ち止まつてもダメだもんね！ 勇気を振り絞つてリル君を助けにいかなくちゃ！」

少しずつ、ティナの足の震えが治まつてきているのを感じていた。

なんと、その縦に長い裂け目の中は階段になつていたようで、ティナはわき田も振りずに飛び降りるようにして駆け抜けていく。

後を追つよに僕も進み始めたけど、この中は外よりもじめじめしていく、地面がとても滑りやすい。気を抜いたらいつでも転んでしまいそうだ。

「あやつー！」

ティナの短い悲鳴の後の、どたどたと騒がしい音。これは滑っちゃつた時の音だよね……。ティナっておっちょこちょいなのかな。

「大丈夫ー？ もしかして滑っちゃつた？」

駆け下りながら、ティナに声をかけると、奥から「いてて」という声が重なつて聞こえてくる。

他にも誰かいるの？ 声は高かつたから女の子か小さなポケ

モンかな。

「あ、ごめんなさい！」

僕が駆け下りた時は、ティナが謝っている最中だった。ぶつかつてしまつたのかなと推測してみる。

謝られているポケモンは、無言でティナを上目遣いで見つめていた。

そのポケモンの体は全体的に青く、自分の体と同じくらいの尻尾が付いている。……もしかして、リル君？ リオ君から教えてもらつた情報と綺麗に一致する。

無言で見ているんじゃなくて、怖くて何も言いだせないのかも……。

「ティナ、よく見てみて。この子、ルリリのリル君だよ」

えつと、目を見開いて驚いているところから察するに、何で僕が名前を知つているんだろうとも考へてゐるのかな。

「あつ……。本當だ。リル君！ 上でお兄ちゃんが待つてるよ。早く上に行こ？」

ティナの誘いを体全体を横に振つて受け入れないリル君。あのポケモン達に騙されたから警戒心が強くなつてゐるのもしれない。

「大丈夫、僕達は君を騙したり、酷い目に遭わせたりなんかしないから。ね？」

それでも、ボク達の誘いを受け入れない。僕は何か事情があるのかもしれないと思った。

ティナも同じことを思いついたみたいで、優しく、リル君と田の高さを同じにしながら、元々あまり変わらないけど、訊ね始めた。

「リル君？ 何か困っている事はある？ お姉ちゃん達が助けてあげるから、素直に話してみて」

「あ……ひと」

リル君がやっと口を開いてくれたけど、おとつてなんだろ。音は水が垂れる音しかしないし……。

「ん？ もう少し大きな声で言つてみて」

「宝物を、落としちゃったの……」

今にも消え入りそうな声だつたけど、このが洞窟とこいつどもつてなんとか聞きとることが出来た。

宝物……。小さな子だから、綺麗な石とか、そちら辺に落ちているのもなのかな。あ、でも、小さな子って細かい違いもすぐに見つけるからなあ。そういうのだったら骨が折れそら……。

「分かった。私達が探してきてあげるー、その宝物つて、どんなの？」

リル君の目がパッと輝いたて、さつきまでの雰囲気を一変させた。どこにでもいそうな、子供のような雰囲気を身に纏っている。

きっと、これがこの子のいつもの姿だね！」

「水のフロートってこの。水色で、えっと、えっと……」

「み、水のフロートー？」

ティナの驚きようから考へると、かなり珍しい、または高価なものなのだろう。分からぬにけど。

「わかった、必ず見つけるよー。ティナ、先にリル君を上まで送つていつてもうひとついい？」

形状も色も何も分からぬ。だけど、何故か見つけられると思えた。

「うん、分かった。ヒカルもあまり動かないでね？」

それは僕を心配するものなのか、僕とすぐ合流したいからなのか……。どうだろ？ 田を見る限りはどちらの意味にもとれる。

「それじゃあ、僕はこの辺りで探す事にするよ

ティナもその言葉を聞いて軽く微笑みながら、リル君と横になつて、慎重に階段を上つて行つた。わざ落ちちゃつたから慎重になつてるんだろう。

その後ろ姿を見送つて、よし探そと前を振り向いたら、突然泥

の雨が降り注いでくる。

その雨の中心には青い、ぐすくぐすした体をしているポケモンがいた。

「えつ、どうしたの？」

こきなり泥をまき散らすものだから、心配して駆け寄ると、突然泥の塊をぶつけられる。結構痛いんだね、泥の塊って。

それより、泥が田や口に入つて氣分が悪い。今の顔はきっと凄い事になつていいんだろう。

説得を試みたけど、何も聞いちやくれない。言葉の代わりに飛んでくるのは、泥の塊だけだった。最初は痛いだけだったんだけど、だんだんと体がだるくなつてきてている。ピカチュウは泥とかに弱いのかもしれない。

泥のせいか、朦朧としている意識のせいか。とにかく、見にくる目で相手の顔を見てみると、何かに操られているのかと思うような感じだつた。自我が無く、何かに突き動かされているような、そんな感じ。

ここで、僕は初めて危機感を持った。だって、さっきまでは話の通じるポケモンだと思っていたけど、話が通じないなら僕のこの状態はかなり危ない。

「危ないよヒカル！」

僕の左側から、また泥の塊が飛んで來ていたようだ。当たる瞬間

にティナが飛び出してきて庇つてくれたみたい。

ティナは一呼吸も置かず走り出すと、その泥の塊を打ち出した
張本人に頭から突っ込んでいく。

技を出した硬直か何かで動けなかつたそのポケモンは、ティナの一撃をもろに受けてしまつて大きく、放物線を描くように吹き飛ばされた。

もちろん、その衝撃には耐えきれなかつたようだ、ぐるぐると皿を回している。

「『めんねヒカル。私のせい』で、ヒカルを危険に巻き込んで……」

「大丈夫だよ、僕は気にしないから」

垂れていた耳が、その一言でまた元通りになる。とても分かりやすい。

「ホント？ ホント？」

僕もさつきの言葉に嘘はなかつたし、ちゃんと頷く。ティナは感激した様子で走り寄ってきた。

「許してくれてありがと！ まずは、オレンの実を食べて。それから、やつべきまで忘れていたダンジョンの事を教えるね」

オレンの実と言つのは、体力を回復してくれる木の実だそうだ。味は色々と混じつていてよく分からなかつたけど、朦朧とした意識が回復するのは分かつた。

話を聞くうちに、元気にして謝ったのか分かるような気がしてくる。

要約すると、「ここ」、不思議のダンジョンに住むポケモン達は何か凶暴になつていて、いつ襲つてくるか分からない事。また、最近は不思議のダンジョンの中で遭難者などが相次いでいるから、子供はむやみに近づいてはいけないという事らしい。

ちなみに、その遭難者を助けるのが探検隊の仕事と云ふことも言つていた。その時のティナの生き生きとした表情は、今まで見た中で最高のものだったと思つ。

「そんなことがあつたんだ」

ティナは、多分この凶暴になつているといつ事を教え忘れた自分のせいで僕がけがをしたつて思つているのかな。

「それと、ティナ。何でかは分からぬけど、僕はあまり他の二ингン、この世界では他のポケモンを傷つけたくないんだ」

「何で？ 私もあまり他のポケモンを傷つけたくないけど、何もしなかつたら自分が倒されちゃうもん」

「僕も分からない。二ングンだったこの記憶があれば分かるのかもしれないけどね……」

そこでの話は終わりになった。

「」の後は、近くの水たまりで体についた泥を洗い流し、水のフロートの搜索を続けた。

「この不思議のダンジョンは海岸の洞窟と呼ばれているみたいで、確かに海と接していて、海水が至る所に溢れ出ている。

また、この洞窟を支えているのは、入口の形にも近い、無数の細長い柱だけ。その柱の中に階段があるときがあつて、それを使いながら降りて行つたけど、水のフロートを見つけることは出来なかつた。

最深部は海の下にあるのに海水が入つてこない、本当に不思議な場所で、海を下から見上げるという初めての体験が出来た。記憶が無いから、初めてかどうかは分からぬけど。

と、地上に戻る時に思い返してみれば、搜索よりもその不思議な地形を見る事に力がいつてしまつたかも知れない。

「見つからなかつたね……」

ティナから漏れる声は、そのやりきれない気持ちがありありといふかべられる。

「ねえティナ。こういつ落し物を探す仕事つて無いの？」

励ましてあげたい。そう思つた僕は、洞窟の中でした探検隊の話に誘導する。上手くいくかは不安だけどね。

「それは探検隊の仕事だよ」

あまり声の表情は変わらなかつたけど、探検隊と言ひコードを引張り出せれば十分だ。

「それじゃあ、ティナと僕で探検隊をやるわよー。リル君の水のフロートも探してあげたいし、リル君を助けるときのティナの表情を見て、ティナは探検隊に向いていると思つたんだ」

「えつ
」

その時の、嬉しさと喜びと、楽しみとちょっとびりの不安が入り混じつた、ティナの表情を忘れることはできない。

「私……探検隊に何度もなるわ」と、頑張つてたんだ。だけど、勇気が無くて、そこまで出来なくて……。でもね、私、ヒカルとなら出来ると思うんだ！あの時、ヒカルがカラナクシに襲われているときも、本当は助けるのが怖かった」

ティナはそこで言葉を区切る。きっと、この先紡ぎだされる言葉は、ティナの決意の言葉だわ。僕は、それをしつかりと受け止める必要がある。

「自分が襲われたらどうしようとか、怪我を負つたらどうしようとか、そんなことばかり考えてた。でも、飛んでくる攻撃を見た瞬間、そんなのどうでもよくなつたんだ。ヒカルが助かればそれでいいと思えた。ヒカルといふと私は勇気が出てくるの。だから、私もヒカルと探検隊をやりたい」

洞窟内で交わした言葉は、きっと一生忘れることができない物。そして、ティナというポケモンに出会えてとてもよかつたと、心から思えた瞬間でもあった。

第一話・海岸の洞窟（後書き）

次回は、リル君達とのお話をからです。あのまま放置とこうことはないのです安心を。

第三話・長い一日の終わり

「本当に」「めんね……。見つけられなかつたんだ」

しゅんとするティナの横顔を見ると、無責任に引き受けた僕にも罪悪感がわいてくる。

「いいんです。リルが助かつただけでも十分ですから」

そういうつもりだと嬉しいけど、本当は絶対に見つけなきゃいけないんだよね。

僕にもティナにも、彼らにかける言葉が見当たらず、重苦しい雰囲気が辺りを支配する。リル君もリオ君も気まずそうな顔だ。

「」の雰囲気を破るのは僕の役目だ。今日はティナにたくさん助けてもうつた。一つぐらい恩返しをしないと。

「リル君。必ず、水のフロートは見つけ出すから。それまで待っていてくれるかな」

リル君はこくつと、小さな体で頷いてくれた。

「それでは、ボク達はそろそろ帰らないと……」

「そろそろ暗くなるから、リオ君達も気をつけて帰つてね

ティナも、別れの言葉は重苦しい雰囲気の中で言つ事が出来た。

その声は少しの決意が感じられる、はつきりとした声。

僕とティナは彼らの後姿が見えなくなるまでしつかりと見送る。小さな子を見守るのは当たり前だし、また変なポケモンに絡まれちゃうかもしれないから。

「私達も行こうよ。もう少しで完全に日が落ちちゃうよ?」

とティナに言われて気付く。日が傾いてから海岸の洞窟に入つたのに、全然時間が経過していない。少しだけ太陽が動いたくらいだ。

「ねえティナ。不思議のダンジョンの中にいた時間ついでになつてるの?」

ティナはもう歩きだしていて、僕の数歩先にいたけど、振り向いて答えてくれた。

「私もよく知らないの。ダンジョンに入つたのもこれが初めてで、前までは他のポケモンの話しか聞いて無かつたから」

ティナに分からんじや、僕に分かるはずがない。難しい事を考えるのをやめて、僕も歩きだす。

少し歩いた、交差点に差し掛かった所でティナが話しかけてくる。

「ヒカル。私達の初めての依頼はあの兄弟からの依頼だね。ちょっと強引に引き受けちゃつたけど」

「そうだね。だから、絶対に水のフロートを見つけ出さう。」

ほとんど沈みかけた太陽の代わりに、空に浮かび始める真っ白な月。その静かな光のおかげで、僕達は今日の事を振り返り、目的を再確認する「」ことが出来た。

真っ白な月と両側に灯された松明に照らされる、妙にフレンドリーなピンク色のポケモンをモチーフにした建物。その真下の部分には鉄で造られた格子が嵌められている。

「」がフレンドリーなギルドを選んだのかな。ティナ入りしなきゃいけないんだ

それで、ティナはこのフレンドリーなギルドを選びたのだ。ティナらしいや。

「実は、ギルドの中で一番修行が厳しいともいわれているけど、一緒に頑張ろうね！」

おかしいな。さつきまでフレンドリーに見えたこの建物の笑みが邪悪に見えてきた。もつ、悪の大魔王のような風格さえ漂ってくる。

「入口の前、地面の方にも格子があるのが分かる？　あそこに乗ると不気味な声が聞こえるんだ」

不気味な声。僕はそれを聞いて、乗つてみたいという感情がどんどん大きくなっていく。ティナは避けたがってたけど、ちょっとこのまま前進してみよっと。

「やあキミ達！　ボクのおうちの前で何をしているんだい？」

後もう少しで格子に辿りつかるところで、僕は後ろからフレン

ドリーな声が聞こえるのを感じた。

「えつ、もしかして……」

ティナが驚いているので、気になつて後ろを振り向く。そこにはこここのギルドと同じ姿をしたポケモンがいた。

「ん？ ああ！ 自己紹介がまだだつたね。ボクはブクリン。こここのギルドの親方だよ！」

最初にこのギルドの外見から感じたのと変わらない印象を、このブクリンというポケモンは持つてゐるみたいだ。親方だつて、いふのにそんなに怖く感じないや。

「わつ、私はティナつて言います！ 」のきつ、ギルドに弟子入りに来ました！

ティナはかなり緊張しているみたい。僕と喋つてた時は随分と饒舌うぜつだつたのに、今はかなりつつかえつつかえになつてゐる。

「やつた 新しいともだちだ！ ちょっと待つててね、中で早く登録しよう！ キミも新しいともだちだよね？」

「きなり僕の方に話を振られた。友達とは弟子の事と解釈し、はいと答える。

それを見るや否や、嬉しそうに格子を破壊して奥にあつた梯子はしを下りていくブクリン親方……。

「早くついてきてね。地下一階で待つてゐよ。ともだちともだち～

ハイテンションでフレンドリーなこのポケモンに呆氣ことられながらも、僕達はギルドに足を踏み入れた。

中は外とはずいぶん違った感じだ。カラフルな床や壁に、よく見れば至る所に植物が生えている。食堂らしき所からはがやがやと騒いでいる声が聞こえてきた。

「うわー！ ボクのお部屋はひつけだよ！」

ブクリンの親方の扉は木製だったけど、その周りは華やかなピンク色で彩られている。

促されるままにブクリン親方の部屋に入る僕達。松明の臭いが鼻についたけど、後ろに積まれたたくさんのお宝の方が印象に残った。

「うーーで登録をするからね！ チーム名を教えてくれる？」

チーム名？ 僕は何も考えてないけど、ティナには何か考えがあるのかな。

「え、えええ！？ チーム名ですか？ うーん……」

僕としては何か意味のあるものがいいなあ。でも、特に思いつかない。

「私の誕生花にヒベルティアって書つのがあるの。それからじつ

て、ルティアつていつのはどうかな?」

「チームルティアかあ。響きも好きだし、僕もこれでいいよ」

「決まつたね それじゃあ登録するよ」

プクリンが「とうりくとうりく、みんなとうりく……」となんの脈略もなく歌いだす。きっと、これが登録の儀式みたいなものなんだろ??。

「たあ————！」

耳が張り裂けそうになるぐらいの大声でプクリンが叫んだと同時に、自分の体に力が入らなくなっていくのを感じる。

ピカチュウになつたから聴覚が増したのかな……。

気絶する数瞬前、そんな事を考えていた僕だった。

田を覚ますと、見慣れない部屋のベットの上に寝かされているようだ。あんな大声を聞いた後だから、まだ耳鳴りが酷いよ……。

「お、気がついたか。なんといつか、オマエ達も……災難だつたな

」

僕の横にいたのは、僕と同じくらいの大きさで、青い羽根にカラフルな体を持つていて、極めつけには頭に黒い音符マークがついている。なんだかとても派手なポケモンだ。

「ワタシはペラップ。親方様の一番弟子だ」

「僕はヒカルって言います。種族はピカチュウです」

と、お互に軽く自己紹介をしておいた。これからは一緒に働く訳だし、仲良くしていた方が楽しいもんね。

「とにかく、登録は済ませたようだし、明日からはキッチリ働いてもらひからな。そつちのイーブイにも伝えておいでくれ」

それだけを僕に伝えたペラップは、すたすたとこの部屋から出でいく。これを言つ為だけに待っていたのかと考えたら、ペラップはいいポケモンなんだなあと思つた。

ティナはまだ眠つている。よほどあの声の衝撃が大きかつたんだろつなあ。

かわいそうだけど、少しティナをゆすつてみる。明日の事だもん。今日伝えなくちゃ……。

「う、うーん……」

あ、田を覚ましたみたい。田を前足でこすりながらも起きあがつた。

「なあに？ 私も少し寝てたいよ……」

「明日からキッチリ働いてだって。ペラップってポケモンが言つてたんだ」

ティナはよく分からぬ返事のような返事じゃないような声を出し、また眠りについてしまった。

僕ももう寝ようかな。明日は大変そうだもんね。

田を開じると、今日の出来事が次々と思い返される。

ティナに助けてもらつた事。リオ君にお願いされて、怖いながら探検に行つた事。カラナクシというポケモンに襲われていた僕を、またティナが助けてくれた事。探検隊をやろうつて言つた時のティナの表情。それからそれから……。

今日起きた出来事に身を包まれながら、僕は安らかな眠りの世界へ落ちていった。

第四話・探検隊キット

「おひあひあおおお！ 朝だぞおおおおおー！」

「の前のブクリン親方にはあるけど、それでも鼓膜が破れそうなレベルの騒音が、朝から鳴り響く。

もちろん、この無自覚なのが自覚しているのか分からぬ攻撃に耐えられるはず、僕は目を覚ます。跳ね起きるという表現が正しいかもしね。

「ヒ、ヒカルう？ 何があったの……？」

ティナも、のそのそと藁の布団から抜け出してくる。耳を後頭部にぴったりとくっつけ、音を遮断していくように見えた。

僕も今はピカチュウ。もしかしたら、ティナと同じ事じ事ができるかもしれない。

うーん、耳を動かす方法がよく分からない。ちょっとだけは動くんだけど、あまり大きくは動かせないみたい。

「ペラッピが呼んでるわーー！」

わわ、またあの大きな音が飛んでくる。耳を塞いだと思つたけど、いつもと耳の場所が違うから押さえられずに、爆音が僕の頭に直接攻撃してきた。頭がくらくらするよ。

その大きな口を開けたポケモンは怒った様子で部屋から出て行つ

てしまった、と思つ。視界までくらべてきて、ちょっと離れているだけなのに、さやけて見えたから断定できない。

「えつと、さつきのポケモンがペラップが呼んでるって言つてたけど……。あ、そうだ！ 私達、昨日弟子入りしたんだった！」

ティナがいまさらのよつて、さつきのポケモンがいつていた事を復唱する。

「せうだよヒカル！ 早くいかなきゃー！」

ティナはものすごい焦つっていたけど、その表情には満足げな物も浮かんでいたようだつた。念願の弟子入りを果たせてうれしいのかもしれない。

おつと、僕も早く出なくっちゃ。ティナに置いて行かれちゃう。

「遅いぞオマエ達ー！」

ブクリン親方の部屋の前。そこで朝礼が行われるみたい。僕は着いてすぐにペラップの怒声を聞く事になつた。でも、さつきの声のおかげでそこまで大きく感じないや。

「す、すいません……」

「いめんなさい……」

とにかく、今は僕とティナが悪い。素直に謝つて、恐る恐る朝礼

の隅っこに加わった。

「匹が隅っこに加わったのを見届けると、ペラップが朝礼を再開する。

「えー、何匹か聞いている奴もいるみたいだが、昨日、新しい弟子入りがあった」

僕達の左側の方から、一斉に視線が飛んできた。珍しい物を見るかのようなまなざしのポケモン達もいれば、僕達が入ってきた事を嬉しく思つていて、話しかける気満々のポケモン達もいるみたいだつた。

「こっち向け！ 話しかけたい気持ちも分かるが、それは夕食の時だ。今日はワタシが面倒を見るから、むやみに話しかけないようにな！ 分かったな？」

霸氣の無い、間延びした返事を返す他の弟子達。 良く考えると、僕達からは先輩に当たる弟子なんだよね。失礼のないようにしなくちや。

「返事がだらしないが……。まあいいか それじゃ、今日も張り切つてこくよー！」

「おおーー！」

さつきの返事とは違う、気合いの入った返事がこのギルドに響き渡る。そして、一斉に梯子を上っていく。外に出るのかな。

「チームルティアだつたな。オマエ達はこいつだ

不意にティナが決めたチーム名で呼ばれる。一瞬反応が遅れたかもしれない。やっぱり、まだ慣れてないなあ。当たり前だけど。

ブクリン親方の扉の前の方で呼びかけていたけど、親方の姿は見えなかつた。もう自分の部屋に戻つてしまつたらしい。

「なあに？ 私達は何をすればいいの？」

「おっ やる気があるみたいでけつこりー。 だが、まずは必需品を渡さなければならん」

必需品。きっと、冒険するのに欠かせないものとかなのだらう。あれだけ不思議に満ちた所なんだ。準備をしない方が変に感じる。

「まずはコレ。トレジャーバッグという物だ。冒険に必要なものを入れることが出来る」

ペラップの後ろに置いてあつたバッグを、片羽を使って「こちらに投げる。

僕がキヤッちしてよく見てみる。肩にかけるタイプのバッグで、ティナでも持てるようになつていていた。ボタンを開けて中を覗いてみたら、何かオレンジ色の物が入つているのに気がついた。

「これは何ですか？ オレンジ色のリボンみたいですが……」

「ああ、それはオレンジリボンだ。他にも、キトサンバンダナというのも入っているから確認してみてくれ」

確かに、オレンジリボンの下にそれらしきバンダナが入っていた。
それを認めて、僕はペラッپの方に視線を戻す。

「ヒカル。今開けた方の裏側つていうのかなあ？ そっちの方にも何か入ってるよ」

ティナが言つたのは、きっと体に隣接する部分の事だろう。確かに、ここにもボタンで止めてあるポケットがあつた。

「よく気付いたな。そっちには不思議な地図が入つていて。探検隊連盟と言う所から配布されるものだ。口で言うのも難しいから、実際に見てくれた方が早いかも知れないな」

ポケットを開け、その不思議な地図を開く。雲で覆われているところがたくさんあって、ここいら辺しか見えないようになつていた。

それよりも驚いたのが、オレンジ色の点や黄色の点が付いているところだ。オレンジ色の点は見事にブクリンのギルドを示していて、黄色の点は、昨日リル君を搜索に行つた海岸の洞窟を示している。でも、似ている地形と言つだけで違う可能性もある。僕はこの世界の地形を知らないんだから。

ティナも横から顔を出して眺めていて、その不思議さに驚いたようだ。首を傾げて、不思議な地図を凝視している。その様子から、この点は海岸の洞窟とここを示しているんだなど確信を持つ事が出来た。

「オレンジ色の点はオマエ達の現在地を示しているんだ。そして、黄色い点は行つた事のある不思議のダンジョンを示している。新しい場所に行つたりするとその黄色い点が増えていくのだ」

これについては感嘆の一言だ。不思議のダンジョンを見つけると黄色い点が増えしていくとても不思議な地図……。

「ねえねえ、何で私達が海岸の洞窟に行つた事があるって知ってるの？」

ティナに言われて初めて気付く。僕達がこの洞窟に行つたのは探検隊になる前、ペラップ達に会つ前だ。本當なら知つているはずがない。

「ええ！ オマエ達、もつ海岸の洞窟に行つた事があるのか？ あそこはこのギルドに入つてきた弟子達が、初めて行く不思議のダンジョンなんだぞ？」

「昨日入つたんだ。リル君つていうポケモンを探しに」

ティナの答えを聞いて、ペラップの表情がどんどん曇つていく。僕達をどこに行かせるかを先に考えてあつたのだろう。それを崩されて困つている様子だった。羽を腕のよろこび組んで思案している。視線にも落ち着きがなかつた。

ペラップの中では考えがまとまつたようで、羽を元に戻してまた僕達に向き直る。

「その話は後だ。まだ説明が終わつてないからな。その地図で雲に覆われている所がある。そこは、まだオマエ達の知らないところだ。今はこのギルド周辺しか見渡せないが、冒險を重ねればどんどん雲が晴れていぐぞ」

それもまた凄い機能だ。本当に、この地図は感嘆の一言で取れる。

「最後だ。これは手渡しで渡しておこう」

ペラップから手渡し 羽渡しとも見える でもらった物は、光り輝いている丸っこい物だ。半球のような形で、丸い面の中心にはピンク色で塗つてある。その周りは白く、また両端に羽のようなものが付いていた。

「それは探検隊バッジといって、探検隊の証みたいなものだ。色々な機能があるぞ」

そこで一度口を止め、ペラップは何かを思索する表情になつた。

「ペラップ。このバッジにはどんな機能があるの？」

ティナが口を挟むと、ペラップが我に返つたよつて喋り出す。

「あ、ああ。色々な機能といつても、使つのは一つだけだ。その頭についているボタンを押すとダンジョンから脱出したり、助けを求めているポケモンを救出したりできる。その場その場によって効果が違うんだ」

なるほど。だから色々な機能と言つたときに口を詰まらせたんだ。色々な用途があるの言い間違えだつたんだと思つ。

「これで説明は終わりだ。それで、今日の探検についてなんだが……」

…

そうだ。海岸の洞窟に行かせる予定だつたんだろうけど、僕達が

もう入っちゃつたからね。多分、同じ所じゃなくて違う所を探検させたいんだろ？。

「オマエ達はやる氣があるみたいだから、次のランクの依頼をやらせてみようと思つ。付いてこい」

ペラップに言われるまま、僕達は梯子を上つて上の階へ行く。上の階も下と変わらない雰囲氣で、楽しそうな雰囲氣を醸し出した。

上に着いてペラップを探していると、僕達から見て右側の方にいるのが見えた。

「うひちだ。うひで今日の依頼を決めるが

そこには、所狭しとたくさんの張り紙がされており、どれも同じような書き方をされている。誰かがまとめているのだろう。「これが依頼だ。探検隊とはいっても、基本はこの仕事をやってもららう。困っているポケモンを助けるのが、オマエ達の基本的な仕事だ」

読めない。何か暗号で書かれた文字みたいに思える。

そういえば、何で僕はポケモンの言葉を話せるんだろう。そして、何でポケモンの言葉が分かるんだろう。最初はポケモンになつたらかと思つたけど、文字が読めないとなると違つ氣がしてきた。

「うーん、これにしよう。湿つた岩場なりそんなに難しくないはずだ

ペラップは悩んだ上で、一枚の依頼を嘴で掲示板から剥がした。
それをティナの田の前に置く。

僕の田の前に置かなくて良かった。ティナが丁寧に読み上げてくれる文章を聞いて、内容を聴き取る。

その依頼はバネブーというポケモンからの依頼で、湿った岩場という所に頭の水晶玉を落としてしまったからそれを拾ってきてほしいという内容のものだった。事情を聞いているうちに笑いがこみあげてくる所もあったけど、きっとこのポケモンにとっては死活問題なんだらう。

「そういうことみたい。それじゃあ、私達は湿った岩場に行つて、水晶玉を探してくれればいいの？」

「そういう事だな。それじゃあ、湿った岩場の場所を教えるから、地図を出してくれ」

僕が肩から掛けていたバッグから地図を取り出す。床に広げてもそんなに場所を取らない為、床に広げておいた。

ペラップは依頼書の下の部分を地図に当てる。そうすると、驚いた事に黄色い点が一つ増えたのだ。

「す、じ、い、つ、一、こんなことが出来るんだあ

ティナの感嘆に満ちた声を聞いて、得意気になるペラップ。これを見せるのは、僕達が初めてではないんだろう。毎回、新しい弟子に見せて反応を楽しんでいたに違いない。

「せつめい書い忘れたが、その場に行かなくても、依頼書の下の部分を当てれば地図上にその場所が現れる」

この地図に依頼書。どちらも凄い道具だと思つ。他に使ひた物にもきっと凄い効果が隠されているのだ。ひつ

「その地図は本当にすごいですね」

自然に口から漏れるくらい、その地図が凄いと思った。

「そうだら それじゃあ、初めての依頼、一生懸命頑張ってくれー」

僕達が初めて正式な依頼を受けた瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916z/>

時と想いを超えて～ヒカルとティナの冒険記～

2012年1月5日18時53分発行